

JELA NEWS

ジェラニュース 第13号 2007年8月15日発行 発行責任者 古川文江

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ ブラジル子ども支援 ・ ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



第3回インド・ワークキャンプ3を19名で実施!

～ キリストの手足となる ～

JELAと日本福音ルーテル教会は18歳以上の学生、成人・熟年の方々を対象に、毎年2月にインドのジャムケッド(アジア子ども支援プログラムが支援している地域)でワークキャンプを実施しています。キャンプでは、病気や事故で足をなくした人々のための義足作り、農場での種蒔きや除草、付近の幼稚園・小学校の児童との遊びを通じた交流等、さまざまな奉仕体験ができます。ビデオを用いての聖書からの学びと分かち合いの時間も毎晩設けてあります。奉仕の働きを通してキリストの手足となる、そして自分の信仰を深く見つめる、クリスチャンでない人には信仰生活そのものに目が開かれる貴重なプログラムです。4ページ以降に今年の参加者のレポート抜粋と来年の申込要領を掲載しました。

この号にはこんな記事が

ブラジル子ども支援	2
ブラジル・プロジェクト報告(古川文江)	
初のブラジルフェア	
リラフレカリア(祈りのたて琴)	3
秋のハープ・コンサート&2008年度受講生募集	
インド・ワークキャンプ	4
2007年度参加者レポート	
2008年度募集要項	
難民支援	6
日米の難民支援(松浦由佳子)	
ジュラハウスの家族がカナダに移住	
神様のお恵み(西野みゆき)	
お知らせ	8
第4回世界の子ども支援チャリティコンサート実施報告	
秋から冬にかけての催し	
支援者一覧	
編集後記	

ブラジル・プロジェクト報告

JELA事務局長 古川文江

4月下旬、ポルトアレグレとリオデジャネイロの施設を訪問しました。最新の施設の様子と子どもの状況をご報告いたします。

Centro Diaconal Evangélico Luterano (CEDEL:福音ルーテル・ディアコニア・センター／在ポルトアレグレ)は、2000年にIECLB(ブラジル・ルーテル告白福音教会)のポルトアレグレ福音共同体(CEPA)によって設立された青少年教育福祉施設です。近隣に同じくCEPAによって1985年に始められた2歳から6歳の幼児60人を受け入れるCentro Infantil Lupicínio Rodrigues (CILR:ルピシニオ・ホドリゲス保育園)がありますが、子どもたちは7歳になるとCILRを卒園しなければなりません。2000年以前は、適切な保護も世話も居場所もない貧しい家庭の7歳以上の子どもたちは、社会的な大きな問題となっていました。そのような背景から、人々の熱心な祈りによりCEDELは誕生しました。活動開始後7年を経た現在は、CILRの卒園児はもちろん、近隣ファヴェーラの7歳から16歳の青少年90人が、センターが提供する給食サービスを受け、各種教育福祉プログラムに参加しています。

子どもの成長と保護に大きく貢献するCEDELの働きを高く評価するポルトアレグレ市は、CEDELに隣接する土地を提供しました。CEDELは現在、その土地を利用した活動の拡張計画を着々と進めています。その一つが、より多くの青少年を受け入れるための校舎増築計画です。

JELAはこの計画に対し、日本政府が用意する「草の根・人間の安全保障無償資金協力」に申請することを提案しました。そして今回の訪問の折にCEDELの理事と共に在ポルトアレグレ日本領事館を訪れ、無償資金協力への申請手続きを開始しました。CEDELの校舎建築費の見積もりは1,360万円。日本政府が支援の上限とする1千万円を360万円超過しています。申請にはこの不足額を確かにCEDELが用意するという確証が必要です。JELAは、CEPAが用意する240万円に不足する120万円を支援することにしました。

CEDELの無償資金協力申請が日本政府によって承認されることがJELAの現在の祈りです。活動拡充に向けた建築計画が実現するよう、皆様もお祈りに覚えてくだされば幸いです。そ



在ポルトアレグレ日本領事館を訪問したCEDEL関係者



市から提供された隣接地

してぜひ更なる暖かいご理解とご支援をお願いいたします。

Centro Cristão Feminino(CECRIFE:クリスチャン女性センター／在ポルトアレグレ)はIECLBのディアコニア部門が関わるシングルマザーの家です。今回始めて訪問したこの施設は、路上で生活し、しかも妊娠している女性(多くの場合未成年者)をポルトアレグレ市の依頼を受けて保護し、出産後、乳児が1歳になるまで母子共に滞在することのできる場所です。最高18人を受け入れることのできるこの家には、訪問時に



シングルマザーの家

は6人の少女(最年少は13歳)が共同生活をし、出産を待っていました。

家族の愛情を十分に経験することのなかった

少女たちの多くは、出産しても自らの子どもをどのように愛し、どのように育てたらよいか知識も経験ありません。この家に滞在する間、彼女たちはスタッフの愛情を豊かに受け、料理やパンやケーキの作り方を習い、生まれてくる子どもの衣服を用意し、育児を学びながら、お互いに助け合って家族のように生活しています。家は施錠せず、近隣であれば少女たちは自由に外出できます。これまで元の路上生活に戻ってしまったケースは数例だけとのことでした。一人の少女に「ここが好き?」と聞いてみました。彼女は「まあまあ」と答えましたが、近々母親になるその表情は穏やかで、安心感がみなぎっていました。

Creche Bom Samaritano(良きサマリア人保育園／在リオデジャネイロ)には、イパネマ地区のファヴェーラから毎日100人の幼児が通園します。ここで保育園2日目の2歳の男の子に会いました。彼の15歳の母親は、働きに出かける前に子どもを保育園に預け、夕方迎えに来ます。男児にとって保育園で経験する全ては新しく、不慣れで、不安のために朝からずっと泣き顔でした。おやつに出されたチョコレートケーキも、彼にはそれが食べ物であることすら分らず、手についたベトベトするクリームを不愉快そうに泣き顔で見つめていました。スタッフがケーキであることを教え、彼の口に運ぶと、彼の顔はみるみる笑顔に変わりました。「生まれて初めてのケーキだったのでしよう。」スタッフはそう話しました。

保育園のすぐ近くにはリオで最も悪評高いファヴェーラ、カンタガロがあります。私はイパネマ教会の牧師と共に、山の急斜面に張り付いたように立ち並ぶファヴェーラの家々の間の狭い路地を歩きました。カンタガロを歩き慣れているはずの牧師でさえ絶えず周囲に目を配る緊張した様子に、デジタルカメラを取り出すことも戦々恐々の思いでした。所在無くたむろする若者たち、いかにも場違いな東洋人を凝視する視線、また武装した警官の一团も目にしました。ここでは麻薬取引、銃声、殺人などは日常茶飯事であり、急斜面に作られたゴミ用の滑り台には、時には死体も投げ捨てられると聞きました。

良きサマリア人保育園での実例の一つを紹介します。2年前から通園しているXとYの姉弟の両親は、子どもの養育に全く無関心で、無責任極まりません。父親は薬物中毒で働かず、母親は美容師ですが、働き場所がありません。二人は互いに殴り合い、XとYにも暴力を振ります。保育園の



イバネマ教会のモーツァルト牧師と、
良きサマリア人保育園責任者のピウマ

職員に対しても非常に攻撃的です。先日、XとYが風邪を引き、たくさんのしらみでひどく不衛生な状態になりました。保育園はできる限り保護し、両親に適切な世話をするよう再三説得しましたが、聞かずに持ちませんでした。とうとうXが気管支炎の危険な状態になり、保育園は急遽Xを入院させました。病室のXに付き添うよう両親に言いましたが、後で私たちが知ったことは、父親は付き添うどころか、衰弱しているXをひどく殴ったということでした。Xが余計なことをしてか、保育園に不必要な同情と関心を引き起こした、というのが父親の殴打の理由でした。現在は母親の妹がXとYを世話し、子ども保護裁判に訴えています。しかし、ブラジルでのこのような訴訟には気の遠くなるような時間がかかり、しかも何も当てにできないのが実情です。

多くの子どもたちは、このような危険な状況や環境の中で暮らしており、ブラジルの施設ではいかに子どもを守り、いかに生活環境を改善することができるかと毎日チャレンジを続けています。日本から届けられる皆様のお祈りと献金は、このような施設の働きと職員と子どもたちの大きな希望と支えとなっています。

イースター献金送金報告(2007年4月9日)

Centro Comunitário da Reconciliação	240,420円
Centro Comunitário Casa Mateus	480,840円
Paróquia Japonesa	144,252円



リオのファヴェーラ、カンタガロ

初のブラジル・フェアが開催されました!

6月22日(金)から24日(日)、JELAの1階ホールで初めてのブラジル・フェアを開催しました。ブラジルのオリジナル・アクセサリーを中心に雑貨と食料品を販売し、ブラジル音楽が流れる中、ブラジルコーヒーと手作りの軽食を用意しました。ルーテル教会の方々、友人・知人、通りがかりの方、ブラジル国籍の方、ブラジル語を勉強していらっしゃる方々が予想以上に大勢お越し下さり、毎日午後3時過ぎには日本語

よりブラジル語が多く聞かれるほどブラジル色で彩られました。多くの方にJELAホールの存在を知っていただき、JELAのブラジル・プロジェクトをより広くPRする好機となったと同時に、ブラジル・コミュニティの力強さを再認識した3日間でした。友人・関係者の方々には惜しみないお力添えをいただき、心から感謝いたします。



Creche Bom Samaritano	120,210円
IECLB-PPD	104,539円
Centro Diaconal Evangélico Luterano	64,332円
Centro Infantil Lupicínio Rodrigues	64,332円
合計	1,218,925円

2007年1月1日から6月30日までの期間、JELAのブラジル・プロジェクトのために延べ63名の方から378,252円の献金をいただきました。感謝して報告いたします。

クリスティーナ・トゥーリン ハープコンサート開催!

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)プログラムのプロモーションの一環と致しまして、アメリカからクリスティーナ・トゥーリンさんをお迎えして、ハープコンサートを9月に開催致します。クリスティーナさんは2006年度の「世界の子ども支援チャリティ・コンサート」で日本各地のルーテル教会で

すばらしい演奏をしてくださった方です。
会場と開演時刻は以下のとおりです。

- 7日(金)ルーテル大岡山教会 19:00
- 8日(土)いわき市・平教会(講座研修生の関係教会) 14:00
- 9日(日)山形県・米沢興譲教会(研修生の所属教会) 13:00
- 山形県・三友堂病院(研修生の関係病院) 16:00
- 10日(月)いわき市・かしま病院(研修生の勤務先) 午後
- 13日(木)JELAミッションセンター・ホール (内容はハープ療法講座)
- 14日(金)ルーテル日吉教会 夜
- 15日(土)聖路加国際病院トイスラーホール 14:00
- 16日(日)ルーテル武蔵野教会 14:00
- 17日(月)ルーテル栄光教会・藤枝礼拝所 午後

詳細につきましてはJELAにお問い合わせくださるか、後日東京近郊の皆様へお届けするご案内状をご参照ください。入場は無料(席上献金あり)です。多くの方のご来場をお待ちしています。

2008年度リラ・プレカリア研修講座 二期生募集まもなく開始

2008年4月開講のリラ・プレカリア研修講座の受講生の募集を10月から開始します。興味と関心をお持ちの方は、募集要項・受講申込書をJELA中島までご請求ください。

インド・ワークキャンプ2007体験レポート

JELAと日本福音ルーテル教会は2005年より成人の信仰育成のためにこのプログラムを立ち上げました。毎年2月に一週間程度、インド中西部のジャムケッド村にあるCRHP(Comprehensive Rural Health Project=総合的地域健康プロジェクト)という所でワークキャンプを実施しています。ここでは地域医療や奉仕・伝道活動をしている施設で、JELAが支援している地域です。第3回となる今年(2月18日~26日)の参加者のレポートから、その一部(抜粋・編集版)を以下にご紹介します。



Jamkhed



●「もりだくさんの体験プログラム」
松田光代(日本キリスト教団仁川教会)

インドは思っていたより涼しく、蚊や虫も少なく快適に過ごせた。トイレも水洗で、ペーパーもたいてい備わっていた。聞いていた通りだったのは停電が多いこと、糞があちこちに落とされていることだった。空気が乾燥しているおかげで臭いは気にならなかった。

7日間滞在の間、1日目は施設内の見学、農場での作業、2日目はヘルスワーカーの話、小学校訪問、義足作り、3日目は農場での作業、ショッピング、4日目は村の見学、夕食の日本食作り、5日目は市場の見学、村の文化祭、6日目は主日礼拝と体調も守られ、CRHPの方々のお世話になりながらいろいろな体験をすることができた。

農場にはアローレ先生が案内してくれ、たまねぎ畑の草取りや肥料やり、インゲンやトマトの収穫をさせてもらった。作業の後、木陰で戴いたチャイ(ミルクティー)のおいしかったこと! 何倍もお変わりしてしまった。農場は有機農法、堆肥場ではミミズが枯草と牛糞を分解していた。

義足作りは2回手伝わしてもらった。1回目は採寸、太腿から測る人、膝下から測る人、義足作りの名人モーゼスが次々と皆の寸法を測った。採寸どおり製図されたアルミの板をはさみで切る作業を手伝った。見ていると簡単そうであったが、5ミリくらいあるアルミを切るのはとても力が要った。次は丸めてハンド付けされ筒状になったものを金槌で叩く作業をした。叩くことでアルミは強度を増すそうである。ひたすら無心になって叩いた。2回目の手伝いに行った時には義足にベルトを取り付けるところまで進んでいた。外側は色づけされ、内側に布が張られ、ゴムの足先も取り付けられていた。

土曜日の夜には、義足の贈呈式と文化祭が開かれた。待ちに待った新しい足がもらえる日であった。私達も一人一人に着けさせてもらった。何日も泊りがけで待っていた人たちの嬉しそうな顔を見てとても嬉しくなった。



●「神の愛を素直に受けとれた瞬間」
中村伸子(ルーテル市ヶ谷教会)

その夜、デボーションでRさんのインタビューを見た。彼女は、若十代にして、人生のありとあらゆる悲しみと苦悩を経験し絶望の淵を彷徨い、わが子を死なせたわが身を恨み悔恨の情に苦しんだ。心身ともにぼろぼろになった彼女を雇ってくれるところはない。が、しかし家族にも見放された彼女は生きるために働く場を探し、神の導きによりCRHPの関係者と出会うこととなる。自分を初めて「人間」として扱ってくれ、愛してくれたCRHPの人々のもとで、彼女は神の愛を知り信仰の道を歩み続けている。

しかし、若くしてこれだけの不幸を背負ってきた彼女が、CRHPの人々やアローレ先生をなぜそう簡単に信じられるのか、私にはとても不思議だった。もしかしたらまた裏切られるかもしれない…。そう思うのが自然ではないのか…? なぜ、なぜ…? 私は神に聞いた、なぜなのか。

翌日、起き上がれないほどに私の体調は悪くなっていった。これまでの経験から抗生剤を用いない限り短期間での回復は望めないとわかったが、これは何か意味のある出来事だと直感で気づいていた。そして私はRさんと同じように、同行した仲間から無償の愛を受け取った。多くは記さないが、ありとあらゆる場面で思いやりと純粋な愛を与えてもらったと思う。

そして、私がすべきことは、疑うことなどではなく、ただ信じること、相手の思いやりを受け取ればいいということだけだった! いつも私は強がり勝気で、弱っているところを見せてはいけなかったと思っていたのに、何ということだろう。素直に受け取ったことのない私にとって、ただ受け取るという行為はぎこちなかったと思うが、私は確かに受け取ったのだ、愛を。神の愛を。



●「喜びの力が伝わる笑顔と祈り」
谷口宏樹(ルーテル松本教会)

私は今回のキャンプを通して、信仰のことインドのことについて考えることがたくさんありました。私はまだ洗礼を受けていません。というのも洗礼を受けるきっかけがないからです。自分に神様から何かのメッセージが届くまで洗礼を受けようとは思っていません。

今回のキャンプでキリスト教を信仰するインド人が多くいることに驚きました。プログラムのなかで、キリスト教を信仰するインド人の何人かのインタビューをVTRで見る機会がありました。生活をする環境の違いからか、彼らの信仰の強さは素晴らしいものです。信仰をしようと決めるまでのエピソードもとても感動的なものでした。そのうちのひとりから、信じられるものがなくなった、その状況を神様が救ってくれたのだ、という話を聞きました。それからは祈りをする中で、神様は必ず何かの形で祈りに応えてくれるというのです。

私はこの方のように神様に対して信仰を強く持つことが出来るのか、自分には分かりません。ただこの人の笑顔はとても美しかったのを鮮明に覚えています。本当に美しいものでした。笑顔がすてきだとか、いい笑顔だとかよく言いますが、初めて笑顔というものにパワーを感じました。なんといいか、この人の笑顔で幸せになりました。神様の愛を受けるとはこういうことなのかなと思いました。

彼らのインタビューの最後には必ず「私はいつもあなたのために祈っています。だから、あなたも私のために祈ってください。」と言っていました。この言葉は、キャンプ中そして今もずっと心の中に残っています。世界中どこでも誰かのために祈れば、誰かは自分のために祈ってくれている、すごく力になります。祈ることに喜びを感じるようになりました。祈りって素晴らしいものだと感じました。このことに気づいたことは、自分にとって大きな進歩でした。



●「いのちの使い方を学ぶ」
白川知子(ルーテル新霊山教会)

私はこの12年程、子育てを中心に忙しく、目まぐるしい日々を送っていました。子育ては楽しく、毎日があつという間に過ぎて行きました。子育てを通じた様々な人との出会いもあり、その仲間たちと支えあい励ましあったからこそ、辛い時も乗り越えられました。

教会生活においては、恥をさらすようですが、子どもが幼い時は、泣く、ぐずる、トイレに立つなどで落ち着いて聖書を読んだり、説教に耳を傾け深く考えをめぐらすことがなかなかできないのが現状でした。子どもたちも成長し、だいぶ手がかからなくなり、少しずつ自分の時間が持てるようになり、いろいろな事を考える心の余裕も出てきました。

そうした日々を送るうちに、ふと気がつくやと神様が自分のいのちの使い方について考えるようにメッセージを送り続けていることに気がきました。自分のいのちの使い方を考える時、自分の考え、自分の生き方、自分のやりたいことを挙げる前に、神様は私のいのちをどのようにお使いになろうとしているのか・・・自分の信仰について考える必要があると思いました。

混沌とした日々が続いたある日、インドワークキャンプの案内の中に「キリストの手足となる」という文字を見つけた時、私もキリストの手となり、足となる生き方ができれば・・・少しでも自分のいのちをそのように使うことができたらという思いが湧いてきて、即座に参加を決意したのです。

CRHPの人々の姿を通じて、いつまでも悩む時間があるという甘えや、生きる為に本当に必要な事柄の点検など、考えさせられる事が多くありました。特に神様を信頼し、恐れずに前進しようとする姿に勇気をもらいましたし、私がインドで見聞きし、体験したすべてのことが、神様のご計画のうちであり、私に必要なことだったのだと思うと、神様の愛や憐れみ、メッセー

ジを感じる事ができました。

日本に戻り、具体的に、自分のいのちの使い方方を「キリストの手足になる」ために用いるには何をしたらよいか、何ができるか考えています。先日教会学校でインドでの体験を話したり、義足作りで使用したアルミ板の切れ端をもらってきたものを叩いて疑似体験したり、砂絵用として購入してきた砂で絵を描いたり、ヒンドゥー語で自分の名刺を作ったりしました。親子20名程の活動になりましたが、子どもたちは真剣にインドの現状に耳を傾け、遊びや疑似体験の中で分かち合うことができました。特に、大変な状況の中でも希望をもって楽しみを見出し、しっかり生きていることに驚いたようです。私は教会学校の子どもたちにも自分のいのちを何に使っていくのか、一緒に考えて行きたいと心から願いました。



●「最初の一步の大切さ」
牧野奉子(ルーテル湯河原教会)

夜のデポーションでは、本当に多くのことを考えたと思います。物乞いにどう接したら良いのか分からないという意見が多い中、自分の最寄り

駅周辺に居るホームレスにみんな無関心であるという意見を聞きました。

私は、物乞いに対してもホームレスに対しても何事も無関心なことは罪であると思います。物乞いの言葉を無視しなければいけない、お金をあげてはいけない、一人にあげるときりが無い、と言うけれど、食べ物やお金をあげることは間違っていることではないと思います。以前テレビで、アメリカのシークレット・サンタについて見ました。彼はクリスマスになるとサンタの格好をして街に行き、困っている人に手渡しで100\$あげます。今までに何億ものお金をあげたと言います。これらの100\$で、多くの幸せが生まれたと思いました。初めはあげる相手が一人だけでも、小額でも、それでも始めることに意味があると思いました。

CRHPの活動も、その最初の一步を促すものだと思います。村に溝や穴を掘って水が流れるようにすることや、トイレを物置にするのを辞め、ちゃんとトイレの用途通りに使うことの大切さを教えること・・・そんなこと？ っと思えるようなことだと思います。1を10にすることより0を1にすることは本当に大変なことだと思うけれど本当にやろうと思えば何でも始められると考えます。



第4回インド・ワークキャンプ
参加者募集要項

来年のインド・ワークキャンプ参加者を募集しています。概要は以下のとおりですので、興味のある方はJELAまでお問い合わせください。なお、派遣地は安全な地域です。

- ◇ 対象 : 申込時に18歳以上の方
- ◇ 人数 : 十名前後(書類選考があります)
- ◇ 期間 : 2008年2月中旬から下旬にかけての約十日間(後日確定します)
- ◇ 参加費: 15万円(パスポート、海外旅行保険、予防接種の費用は別途個人負担)。
- ◇ 問合せ: JELA森川(電話03-3447-1521、ファックス03-3447-1523、
(電子メール morikawa@jela.or.jp))

日米における難民支援

難民支援協会 シニア・リサーチャー 松浦 由佳子

○ ニューヨークで

昨年8月にニューヨークを訪れた際、ビルマ少数民族の男性難民が、笑顔でこんなお話をしてくれました。

「私は、故国ビルマで弁護士をしています。少数民族を擁護する活動を行ったため、迫害を受け、知人や親戚に連絡もできないまま、家族とともに国境を越え、タイに逃れました。タイで難民申請し、アメリカ政府に受け入れられ、今は、ニューヨークで法律事務所の事務職員をしています。言葉の問題で、採用されるまで時間がかかってしまい、ビルマでの弁護士経験をそのままアメリカで活かすことができないとわかり、一度は落胆しましたが、その後、アメリカの法律の勉強をはじめ、弁護士資格の習得にむけ取り組んでいます。もちろん、国が平和になったら、真っ先に、故国ビルマに戻り、国の再建に貢献したいです。」

この家族は、ジェラハウスに入居する前の2004年の夏に2ヶ月以上、日本での難民認定を求めて、小さな子どもと一緒に猛暑の中を国連大学ビル前に座り込んでアピールしていたうちの一家族です。当時大きなニュースになりましたので、ご存知の方がおられるかもしれません。



ニューヨークの地下鉄でお話を伺ったビルマ難民父子と(中央が筆者)

○ 世界の難民情勢

いま、世界には、迫害や武力紛争、圧政等から逃れるため、安全を求めて住み慣れた土地を追われた難民が1000万人を越すといわれています。その多くは、周辺国の難民キャンプに逃れ、住んでいます。中には母国から直接、あるいは、上記ビルマの少数民族の難民のように近隣国の難民キャンプなどを經由して日本やアメリカ、カナダ、イギリスといった第三国に逃れてくる難民もいます。

日本とアメリカでは、難民を受け入れる規模や背景も大きく異なりますが、直面する課題は共通しています。先進国の一員として難民

問題に取り組み、これまで全く異なる世界で生きてきた難民たちを、新しい社会に受け入れるべく支援することが求められているということです。

○ 日米NGOの経験交流

日米のNGOが互いの経験や教訓を共有し、よりよい支援を実現するために、昨年5月から、難民支援に携わる日米のNGOによって「難民支援に関わる日米NPOの経験交流」事業(国際交流基金日米センター助成)がスタートしました。日本側は、難民支援協会(以下JAR)、日本福音ルーテル社団(以下JELA)等の5団体が集まり、IRC(International Rescue Committee)を中心とする米国NGOをパートナーとして、お互いの支援現場を訪問しあい、1年間をかけて意見交換を行ってきました。上記のビルマ少数民族の難民の家族にも、この交流の一環でお会いしました。

来日したIRCスタッフやアメリカ人研究者は、私たちNGOの事務所を訪問し、また、アメリカの事例をシンポジウム(*注)で紹介したほか、日本に暮らす難民から直接話を聞く機会も持ちました。さらに、JELAハウスに暮らすクルド難民一家を訪問し、来日までの経緯、収容所の様子、現在の生活ぶりや、多くの難民が先行きの見えない不安な毎日を送っている様子を聞き取りました。



ジェラハウスの自室でIRCスタッフと研究者からインタビューを受けるクルド難民のドーガンさん(後ろ姿)

○ 難民処遇の日米比較

日本では、難民認定にかかる時間が平均でも数年かかり、その間、基本的に職に就くのも難しいため、生計を維持することも、社会活動に参加することも困難な生活が続きます。また認定を受けても、言葉の壁があり、単純労働にしか就けず、キャリアアップする道が描けない、学費が高く、高等教育を受けることができない、といった現状もあります。他方アメリカで

は、難民は原則として入国、もしくは認定された後、90日以内に何らかの職に就くことが奨励されています。そして、これを実現するために、政府から資金援助を得たNGOが職業訓練や語学研修を提供しています。難民を早期に自立・自活させることで、福祉予算など公的資金からの支出を抑え、また、難民も社会の一員として、アメリカ社会に貢献すべきだ、という意向が反映されています。

実際に、アメリカでは、かつて難民だった人たちがアメリカ社会で生き生きと活動する姿を多く目にするようになりました。IRCやLIRS(Lutheran Immigration and Refugee Service:ルーテル移民・難民サービス)のような難民受け入れ支援を担うNGOでも、元難民が、新しく到着する難民を受け入れる支援スタッフとして、自分の経験を活かしながら働いていました。



LIRS代表と日本からの訪問団(左から三人目がLIRS代表、同二人目がJELA森川主事職員)

アメリカで目にした具体的な事例を参考にしながら、JARやJELAを中心とする私たち日本のNGOでも、難民の自立をいかに支援していけるか、模索をはじめています。

○ 「日米交流」の学びのひろがり

また日米交流を通じた学びは、難民ひとりひとりへの支援の工夫や教訓にとどまりません。NGO自身がいかに市民社会と接点を持ち、わかりやすいメッセージを発信し、また安定的に資金を得られるのか、といった広報や組織運営の工夫にまで拡がりを持ちました。例えば、IRCでは、ジョージ・クルーニーやブラット・ピットといったハリウッド・スターが協力し、広報メッセージを発信したり、イベントを行ったりしています。こうしたことに触発され、私たちJARも、より多くの人に難民支援の輪を広げる新たな試みとして、5月30日(水)に「天満敦子チャリティコンサート～世界難民の日にむけて～」を実施しました。特別協賛としてJELAに

ご協力いただき、また、このJELAニュースを通じ、多くの方にご案内いただきました。皆さまからの温かいご支援を得て、当日は、小雨模様のお天気にもかかわらず、ルーテル市ヶ谷センターには200人の方がおいでくださり、天満敦子さんの奏でるバイオリンの音色とともに、これまで難民との接点がなかった方に、日本に暮らす難民のメッセージをお伝えすることができました。

今回の交流事業を機に、日米のNGOのネットワークができ、お互いの支援上の工夫や教訓を今後も共有していくことが決まっています。逃れる先が、日本でも、またアメリカであっても、難民が新しい社会で、安心して暮らすことができることを目指し、これからも国境を越えた交流を続けていく予定です。

*注:このシンポジウムの模様は当日(2006年10月21日)の夜に、NHK総合テレビのニュースで取り上げられました。

* * * * *

ジェラハウスの家族がカナダに移住

2004年10月からジェラハウスを利用して、トルコ出身のクルド人一家4人が、この7月にカナダに移住しました。ハウスでお世話した2年半のあいだに、お子さんが日本の小学校に入学したり、近所の品行の悪い日本人居住者とのトラブルに巻き込まれたり、いろいろの事がありました。



カナダへの移住が決まった直後、JELA事務室を訪問した夫(右の二人)と応対する森川職員



ジェラハウスの家族

本人たちの希望は日本で難民認定されることでしたが、クルド人の方々も認定される例は極めて少なく(トルコ出身では過去に一人もいません)、今回もその願いは叶いませんでした。異国で小さな子どもを二人も抱え、本国送還の不安に怯えながらジェラハウスで毎日を過ごされていました。なにはともあれ、カナダへの移住が実現したことを嬉しく思います。そして、多くの支援者の輪に連なり、JELAが少しでもこの

方々のために協力できたことに感謝しています。ここ何回かのジェラニュースでお知らせしていますように、ハウス利用者の中から日本で難民認定されたり、特別在留許可や第三国への移住が認められる方が続々と現れていることは大きな喜びです。

日本を離れる前に、この一家の小学3年生の長女がJELAへのお礼として描いてくれた絵とメッセージをご紹介します。彼女の将来が、この絵のように明るいものでありますように。



リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座を通して——神様のお恵み——

西野みゆき(鴨川聖フランシス教会)

私が、「祈りのたて琴」(リラ・プレカリア)講座を受け始めて一年3ヶ月が過ぎようとしています。今、我が家の庭には、昨年と同じように、紫陽花が色とりどりに咲き、ほととぎすが美しい声で鳴いています。でも、この私自身は、昨年の私とは違っていることを感じています。この講座を通して、私は神様の私への慈しみと愛を体験し、自分と他の人を受け入れ、愛することを教えて頂いたことを心から感謝しています。

学びの一環として、5月18、19日と25、26日に行われた、リチャード・グローブス氏の「尊厳ある死」の第3と第4講座を受ける機会を与えていただきました。昨年と今年の4つの講座では、古代の様々な宗教や文化的伝統からスピリチュアル・ケアを学ぶというものでした。常に自分自身に向き合うことを示されました。今回は、「祈りのたて琴」で自分を見つめる学びを続けてきたこともあり、自然に自分自身に向き合うことができ、大変恵まれた時間をもつことができました。自分の心の痛みを知りその痛みから解放されてこそ、人の苦しみに寄り添うことができるということを実感しました。また、様々な儀式や体験を参

加者全員と共有することを通して、スピリチュアリティを経験し、神様と人の前に心を開いて生きることの大切さを学びました。

そして今年の4月から、東京老人ホームときぼうのいえで、週一回のペースで、実習が始まりました。普段の歌とハーブの練習の大切さ、また、それ以上に、自分の心に向き合い、神様との祈りの時間を持つことの必要を身に沁み

て感じています。未熟ながらも、患者さんに寄り添わしていただく貴重な神聖な時間の中で、私たちに注がれている神様の慈しみと愛を共に感じています。いつも自分をからっぽにして、患者さんから学ぶ姿勢を大切にしていきたいと思っています。私たち受講生へのたくさんのサポートとお祈りに感謝いたします。

写真:ときぼうのいえの居住者にハーブを弾く西野さん(右端)



第4回世界の子ども支援チャリティコンサート実施報告

支援者一覧 (2007年3月1日～6月30日)

皆様のご支援により、今年も「世界の子ども支援チャリティコンサート」を開催することができました。ありがとうございます。

今回は九州、山口、広島、京都、静岡、東京にまたがる9会場で10回のコンサートを開催し、来場者総数669名、席上献金総額876,750円(他に送金が22,000円)が与えられました。ピアノ演奏者のシーグフリード・テッパーさんはこの会場でも大人気で、証しを含めた素晴らしいコンサートをしてくださいました。また、コンサートの運営支援のために20に及ぶ組織・団

体が協賛金をご提供くださり、経費の大きな部分を賄うことができました。ご協力くださった皆様に心より感謝いたします。

頂戴しました献金は、会場でご覧いただいたスライドにあるような、困難と戦う世界の子どもたちを支えるために用いさせていただきます。ありがとうございます。来年も継続して開催できるようにお祈りください。また、このコンサートのゲストとしてふさわしい日本人演奏家をご存知でしたら、ご紹介いただけるとありがたいです。



博多教会



神水教会



熊本教会



徳山教会



西条教会



静岡英和女学院



栄光教会



本郷教会

●各プログラム支援献金

浅見正一・君江/尼嶋治/荒井梯次郎・和子/安藤淑子・カツイ/石澤とし子/石田浩子/市ヶ谷教会/市原周子/井上新/ヴァルガス、ケリー/ヴァンデルタンク・エリ子/上原文子/江澤妙子/大塚真佐子/岡部瑞子/小川晶人/小川幾代/小川金光/小川ナカ/柿沢純工/上窪松子/河野久美子/来嶋紀美子/吉川幸子/きぼうのいえ/京谷信代/釧路教会/倉重ミドリ/グリテベック・ローウェル/古財悦子/児島和子/佐瀬萬亀/斯波健一/尻無浜紀美子/鈴木やす/杉浦りえ/関口佳子/高津和子/高橋康子/玉名教会/堤重敏/寺田幸子/鳥居和代/長尾博吉/中村孝治・敬子/成相圭子/西立野園子/二宮幸美/芳賀明子/萩原耕介/早瀬康平/原口恵子/ハルボーセン美智代/ピースカー、マイケル/平林洋子/廣幸朝子/福田陽子/藤橋日出子/古川文江/ベンケ、パトリック/星野聖明/本郷学生センター/本多美奈子/前島なをみ/益永和代/松嶋俊介/松田美智子/光橋紀子/南節子/宮澤真理子/迎恒夫・千栄子/むさしの教会/毛利庄蔵/森保宏/森田雅子/八坂由貴子/安富英子/山県順子/山崎恵美子/山下勉/山本了/和田雪香/和田みどり/Vargas, Kelly/ 他匿名数名

●賛助会費

尼嶋治/安藤淑子・カツイ/飯野タケ/岩間雪子/大谷忠雄/小川晶人/小川ナカ/上窪松子/河野久美子/倉知延章/桜井永之/鈴木辰典/高橋千夏/高橋寿子/高橋要子/高橋佳子/塚田政司/中川陽子/中村雍子/中村克孝/西立野園子/萩原耕介/日野原直明/平間多喜子/増島俊之/松嶋俊介/南節子/迎恒夫・千栄子/望月秀紘/矢野耐子/山本一男/若原奇美子/ 他匿名数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございます。

なお、匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。また、賛助会費(年間一口2千円。何口でもお受けします)の納入時期はとくに決まっていませんので、お気づきの際にご送金いただければ幸いです。現在、約200名の方が賛助会員としてJELAの活動を支援してくださっています。心より感謝申し上げます。

編集後記

思春期の子どものコミュニケーションは難しいものですが、意外にテレビドラマの親子鑑賞が有益です。ドラマAで女子大生が親友に、「大切にないもののために大切なものをなくしちゃだめだよ」と諭します。画面にうなずきながら、自然に娘の顔を眺めていました。ドラマBでは、両立しない問題の処理に悩む青年に年配男が、「お前にとって一番大事なこと何だ」と感動的に問いかける場面があります。ここを親子で一緒に見られて嬉しかったです。「シスターからのおくりもの」という本に似た言葉が出てきます。「あなたにとって一番大切なものは? と尋ねられて、神様です。と答えられたら幸せです。静かでありながら、霊的生活の反省を迫る、鋭い言葉ですね。インド・ワークキャンプ参加者のレポートを読んでいるときも、同様の問いかけを感じました。(M)

お知らせ

秋から冬にかけての催し

10月には、アンジェロ・イシ氏(サンパウロ大学ジャーナリズム学科卒、「ブラジルを知るための55章」著者、武蔵大学・社会学部・准教授)をお招きし、「ブラジルの社会」(仮題)をテーマに、講演会と音楽と軽食の夕べを計画しています。11月

には昨年同様、チャリティ・キルト展を、また12月には、オークション付きのワインパーティを例年どおり開催する予定です。

いずれも開催日が近づきましたら改めてご連絡を差し上げますので、楽しみにお待ちください。

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区道玄坂1-20-26
Tel. 03-3447-1521 Fax. 03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp
口座番号 00140-0-069206 加入者名 日本福音ルーテル社団